

自然誌 だぶり

Natural history



三重自然誌の会情報誌 105号

2015年 9月

水色のニホンアマガエル

5月の終わり頃から、家の近くにアマガエルがたくさん跳びはじめたので、毎日のようにアマガエルを追いかけていました。みんなに見せてあげようと思い、幼稚園に持っていきました。幼稚園でも、みんなでアマガエルを探しました。

安濃幼稚園は、まわりが田んぼなので、たくさんのアマガエルがいます。みんなで育てているミニトマトの鉢にもたくさん来て、園庭にはいつも何匹かのアマガエルがびよんびよん跳ねています。

6月12日、遊んだあとで教室にもどる時に、テラスから園庭を見ると、水色のアマガエルがいるのをみつけました。

「あれ？青いな？普通とちがうな」と思ったので、先生に「ちょっと、あれとってきていい？」と聞いて、本当はダメなのですが、上靴のまま園庭に出てアマガエルを捕りにいきました。そっと近づいたので、すぐに捕まえることができました。捕まえたときは「やった！」と思いました。よく見てみると、「何じゃこりゃ？きれいな色やな！」と思いました。お母さんが幼稚園に迎えにきたとき、「これ見て！水色のカエルや！ぼくがみつけたんや！」と言いました。

ぼくは自分でアマガエルを育てると言ったのですが、図鑑で調べてみると生きた餌しか食べないと書いてあったので、育てるのが大変だと思い、家で相談してミエムに持って行くことにしました。

水色のアマガエルが、さんちゃんの隣に展示されてから2回も見に行きました。

ぼくは、今でもアマガエルを探しています。また、他にもチョウやバッタ、トンボ、ザリガニ、ヤゴ、イモリ、ドジョウなどを捕まえて育てようとしています。お母さんは、「自然に生きるものを人間が捕まえたとしても、育てるのは難しいし、大変だよ。」と話します。ぼくは、生きもの博士になれるかな？

※本人の話を母親が聞き取り文章化しました



写真 水色のアマガエルと発見場所（鉢のおいてある所）

浅生 康介（あさお こうすけ）：津市安濃町清水

安濃町でみつかったニホンアマガエルについて

中 野 環

水色のニホンアマガエルをみつけたときのようすを、お母さんが康介さんから聞き取り、文章を書いてくれました。

生きものを飼育することは難しく、私自身も、数多くの失敗を繰り返しました。その度に、家族や知人から意見をもらいましたが、飼育して始めて、その生きものを知ることができることも事実ですので、恐れずに、チャレンジすることは大切だと思っています。



写真1 三重県総合博物館で飼育のようす
(6月20日撮影)

さて、ニホンアマガエルについては、体色が緑色ではなく、黄色や水色の個体が確認され、話題になることがありますが、生物誌として記録されることは多くありません。今回、水色の体色をしたニホンアマガエルがみつかったのは、津市立安濃幼稚園(津市安濃町内多)の園庭です。浅生康介さんが、2015年6月12日に、緑色とは異なる体色のニホンアマガエルに気づいて採集し、翌日、三重県総合博物館に持ってきてくれました。体長は13.5mm、最近陸上にあがったばかりの個体で、通常は緑色をしたニホンアマガエルがもつ色素のうち、黄色の色素が欠損したことで水色となったものと考えられます。6月20日からは、三重県総合博物館のオオサンショウウ

オを飼育している水槽の一角に、30cmのガラス水槽を配置して飼育展示しています(写真1)。

水色の個体が、野外にどれほど存在するのか、緑色をした個体と比べて生存率に違いが生じるのか、地域によって発現する割合は異なるのかなど興味はつきません。同じ時期に、鳥羽水族館で6月20日から水色のニホンアマガエル7個体が公開されたことが新聞に掲載されました。こちらは松阪市内の水田で発見されたようです。

ちなみに、現在、私は水色のリックサックを利用しています。野外で荷物を放置して、生物調査に没頭していると、自分の荷物をどこに置いたか忘れて、探しまわることがあります。赤やオレンジといった目立つ色をしたものよりも、野外では水色が目立つように思うためこの色を選択しました。私の感覚が正しければ、野外で水色の個体は敵に狙われやすくなるのではないのでしょうか。

本稿作成にあたり、上田利彦氏にはニホンアマガエルの飼育についてご教示いただきました。感謝いたします。

(なかの たまき：三重県総合博物館)

三重県産ノギクについての知見

市 川 正 人

広辞苑(第5版)で「野菊」をひくと、①野に咲く菊ノコンギク・ノジギクなど、②ヨメナの別称と説明されています。一般的に野菊とされるのは国内に100種ほどと思われませんが、県内でも比較的にすることの多いノコンギク、ヨメナ、オオユウガギクの3種と、現在、県内に生育を探し求めているユウガギクについて同定上重要な頭花と瘦果の形態的特徴を表1に示しました。

表1 野菊4種の形態的特徴

	ノコンギク	ヨメナ	オオユウガギク	ユウガギク
花 弁 の 色	白色～淡青紫色	白色～青紫色	青紫色	白色
頭花の大きさ	2.5cmで変異は小さい	3cm内外であるが変異が大きい	3cm内外で変異は小さい	2.5cmで変異は小さい
瘦果の長さ	2.5mm内外	2.5～3.0mm	3.0～3.5mm	2.5mm内外
冠毛の長さ	5mm内外	0.5mm以下であるが明瞭で長短不揃い	平均1mm程で極めて長短不揃い	0.2mm程であり不明瞭

表中の記載は、図鑑に説明される各種の概要におおよそ合致していますが、相違点もいくつかあります。例えばヨメナで、瘦果の長さは一般的に3.0～3.5mmとされているのに対し、熟した果実でもほとんどが3.0mmに達せず約2.5mmであること、頭花の大きさは3cm内外とあるが、変異が大きく小さいもので1.5cmの群落にも出会いましたので、図鑑の記述を鵜呑みにはできません。

県内の野菊について特筆すべきことのひとつは、津市内の3ヶ所にオオユウガギクとノコンギクの雑種が生育していることです。頭花が3～4cmと大きく、冠毛は2～3mmと比較的長いのが特徴です。この雑種は図鑑にもありませんので、新しい雑種かもしれません。また、県内にはユウガギクが生育しないことも謎です。奈良県の大和高原で生育しており、同じような環境の伊賀・名張市あたりに見当をつけ広く探し求めましたが、生育を見ませんでした。情報をお持ちの方がおみえでしたら御教示いただければ幸いです。

路傍に見るヨメナやノコンギクといえども頭花の大きさ・花色の変化・花卉の形の微妙な相違などに趣があり充分楽しめます。

最後に、雑種についてご教示いただいた副島頭子氏と藤井伸二氏、ユウガギクの生育地を案内いただいた横山和志明氏に感謝いたします。

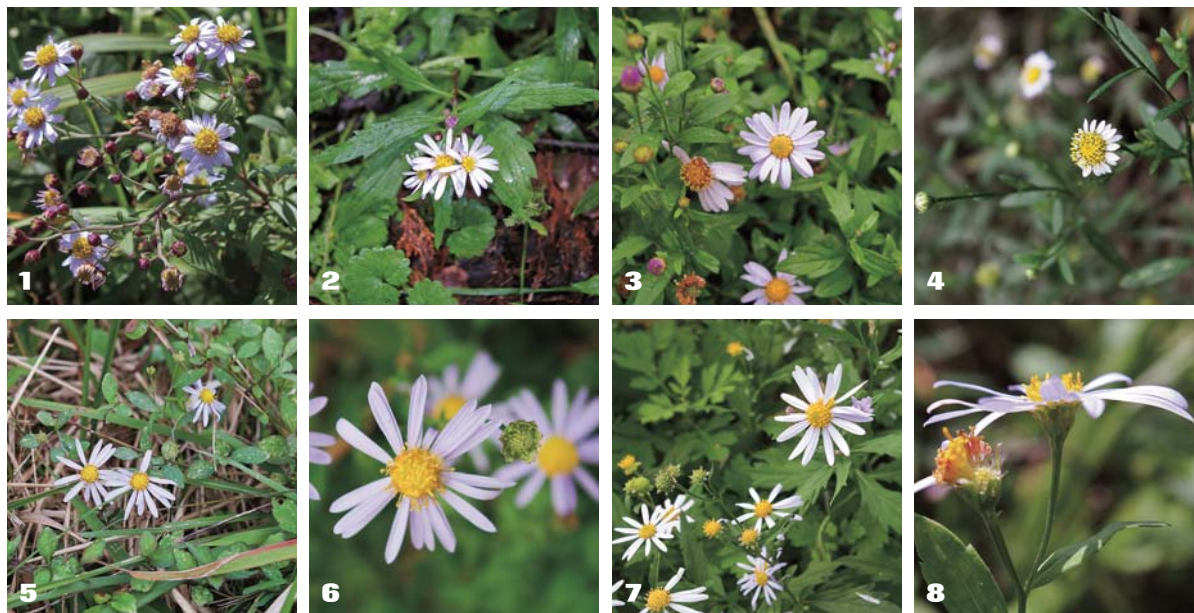


写真 1.ノコンギク 亀山市小川町, 2.ノコンギク(葉が長い型)津市一志町波瀬, 3.ヨメナ 菰野町田光, 4.ヨメナ(花が小型:1.5cm) 桑名市多度町平古, 5.ヨメナ(花・実・葉など全体が小型)津市河芸町浜田, 6.オオユウガギク 奈良県山添村片平, 7.ユウガギク 奈良県宇陀市室生無山, 8.オオユウガギク×ノコンギク(冠毛:2～3mm)津市河芸町上野

(いちかわ まさと:四日市市堀木1-4-5)

道路標識の支柱から巣立ったヤマガラ

今堀聖史

ヤマガラは公園や里山でも繁殖し、割合よく見かける鳥ですが、これまで巣立ちの瞬間を見たことはありませんでした。本年5月23日に、予想もしない場所からヤマガラが巣立っていくのを観察したのでそのようすを紹介します。



写真1 巣のあった道路標識と出入りする親鳥



写真2 外のようなうかがうヒナ

青山高原の三角点付近で、道路標識が腐食して中ほどから折れ、半分の高さになった支柱をロープで結わえて立ててありました。道路を挟んだ駐車場でホトトギスなどを待っていたとき、ヤマガラがその支柱の中ほどに入っていくのが目に入り、穴が開いていることがわかりました。しばらくして出て行きましたが、虫やクモなどの餌を探していたのだらうと思っていました。

ところが、十数分して再び入っていくとき餌を咥えているのがはっきり見え、ヒナがいることが判りました。親鳥が出て行ってから近くまで見に行ったら、上部の穴からヒナが1羽飛び出して草むらへ下り、20mほど先の灌木へ入っていきました。ヒナがまだいるだろうと約1.4mの支柱の上から覗いてみましたが、内径が約10cmの筒は上部の赤さびが見えるだけで下部は暗くて何も見えませんでした。支柱の上部と中ほどに腐食してできた楕円形の穴(10×15cm)があき、根元付近に約3cmの穴が開いていましたが暗くて見えませんでした。

しかし、支柱の下部で動いている気配があり、10mほど離れた場所でカメラを構えて待っていました。しばらくすると2カ所の穴からヒナが顔を出して周囲を見回していました。1～2分ですぐ草地へ飛び出していくと次のヒナが顔を出して周囲を見回していました。引っ込んでしまうヒナ、穴の縁につかまって羽ばたきするヒナ、盛んに鳴くヒナ、約30分の短い時間にさまざまな姿をみせて5羽が飛び出していきました。飛び出したヒナは、親鳥がすぐに灌木の茂みや草むらへ誘導して見えなくなりました。6羽目のヒナは親鳥が餌を咥えて誘導するのですがあまり飛べないようで、巣のあった支柱から5mほどのマツの木と灌木の枝にとどまり餌をもらっていました。

外界が全く見えない場所で育ち、数分という短い時間に外界を見回しているヒナの瞳が印象的で、親鳥の声がする方向に低空を羽ばたいていく姿は迫力がありました。翌日針金などで巣を引き出してみると、外周は細い根や枯草で作られていて、産座は鹿の毛がびっしり敷きつめられていました。小さな巣で6羽ものヒナが育てられていたのに驚き、腐食して放置されている支柱を見つける探索の行動に感心しました。また、道路わきの自動車や人が行きかう場所は天敵が近寄りにくいのだらうと思いますが、ヤマガラはそういう判断(学習)をどのようにしているのか、小鳥を見る目が少し変わりそうです。

(いまほり きよふみ：津市久居小野辺町1454-30)

羽化後のハッチョウトンボ雄と半成熟雌との連結・交尾を見る

浅名正昌

2015年5月22日、伊賀市下友生の三重県上野森林公園でハッチョウトンボを撮影していたところ羽化後のメスが飛び出した。すると、まだ成熟しきれていないオスがすかさず飛び出し、逃げるメスを空中で捕らへて連結した。このオスは交尾にも挑み成功し、成熟個体同様の交尾態のまま近くの草に止まり、精子の受け渡しの動作までしていた。通常未熟のメスに対してオスが連結を挑んでもそれは叶わず、オスが連結を諦めてしまうのがだが、今回見た事例は違っていた。

初めて見る未成熟個体同士の交尾態に、こんなチャンスは二度とないと急いでカメラを向けたが、すぐに交尾態が解かれ、残念ながら撮影することができなかった。しかし、連結は解かれぬまま近くの草にとまったのであわててシャッターを切ったが、これもまたすぐに連結が解かれた。そのため、連写で4枚撮れたのが精一杯だった。当然オス・メス両方にピントを合わせる時間もなく、メスのピントが甘くなってしまった(写真1)。

オスをよく見ると(写真3)、複眼の赤色部が成熟個体のように広がっておらず、胸部側面・腹部側面も赤くなりきらず暗褐色で、腹部の一部に黄色部すら残る半成熟個体である(写真3矢印部)。また、何よりもメスに至っては翅に見られる“濡れた様なやわらかさ”や体色から(写真1, 2)、前夜に羽化したであろうと思われる個体である。このような未成熟個体同士が成熟個体と同じような連結および交尾態に至った観察記録は、私が知る限りでは見当たらないのでここに報告する。

なお、未熟オスと成熟メスとの交尾態は、2011年6月15日長野県伊那市新山の“トンボの楽園”で、酒井昇治氏が撮影した1例が報告されている(2015;月刊むし(533)57)。



写真1 交尾崩れの連結(上;オス・下;メス)



写真2 写真1の連結が解けた直後の未熟メス



写真3 写真1のオス

(あさな まさあき:伊賀市緑ヶ丘西町)

三重県大紀町の霧穴（鍾乳洞）からホラアナゴマオカチグサ

柏木 健司・吉田 勝次・平山 風太・山口 夕佳里・松下 剛士・狩野 彰宏

ホラアナゴマオカチグサは、カワザンショウガイ科に属する陸産貝類で、洞窟の暗黒かつ湿潤環境に適応している真洞窟棲陸貝として知られています。2mm前後に満たない殻高に加え、主として石灰岩地域に限られる偏在分布から、一部の研究者や洞窟探検家を除き、一般に目に触れる機会の極めて少ない種です。その為、本邦レッドデータにおいて、環境省の絶滅危惧Ⅰ類をはじめとして、16都道府県で何らかの指定が付されています。ただし、筆者はこれまでに調査ないし訪問した多くの洞窟で、本種の死殻に出会ってきました。例えば、富山県黒部峡谷のサル穴では、富山県下から初めて本種の化石個体を報告しています（柏木2012；富山市科学博物館研究報告）。



図1 2015年3月採取試料



図2 洞壁上の本種の死殻。写真中央付近。2015年6月

筆者らは、2015年3月18日に古気候解析研究のための滴下水の採水を目的に霧穴に入洞し、滴下水採水地点を含む数箇所の洞壁と堆積物表面で、本種の多くの死殻を確認しました。また、洞口直下では、恐らくは生体であろう個体を、湿潤状態の洞壁上に認めました(図1)。その後、6月15日に再度入洞し、3月の調査で死殻が多く見られた洞壁で再度、滴下水を採水中に生体を丹念に探しましたが、白色を呈する死殻を採取するにとどまりました(図2)。

ホラアナゴマオカチグサは、三重県レッドデータブック2015で準絶滅危惧種に指定されており、その産地には大紀町が含まれています。具体的な洞窟名の記述はありませんが、市橋(1986；大宮町史自然編)は木屋のこうもり穴と藤ヶ野の穴から本種の産出を記録しています。霧穴は、三重県下において生息洞窟の候補の一つとして追記されます。

霧穴には、本種の生息に適した洞内環境が広範に保存されているので、今後、確実な生体の確認を試みるとともに、死殻を用いた形質の詳細については別途、報告する予定です。

かしわぎ けんじ：富山大学・よしだ かつじ：愛知県一宮市・ひらやま ふうた：徳島県海部郡・やまぐち ゆかり：愛知県名古屋市・まつした たけし：愛知県一宮市・かのう あきひろ：九州大学

御池岳コグルミ谷でシマリスをみる

清水 善吉

シマリスはユーラシア大陸北部に分布し、日本では北海道にのみ生息していますが、リスといえば大方の人はこの種をイメージするくらい大量にペットとして出回っています。ペットのシマリスは、北海道産ではなく外国から輸入されており、一部は公園などにも放たれ、新潟や山梨、岐阜各県では野生化も確認されています（押田・柳川2002；外来種ハンドブック，地人書館）。

三重県においても、鈴鹿山系の御池岳（標高1247m）周辺において、2000年前後からシマリス目撃の情報が聞こえてきました。そこで、2003年10月15日に御池岳コグルミ谷から山頂（丸山）にかけてのルートを踏査したところ、真の谷付近（標高950m，滋賀県東近江市茨川町）で1頭を目撃することができました。

また、本年2015年6月24日にコグルミ谷を登ったところ、標高670m地点の開けた沢内（いなべ市藤原町本郷）で2個体を同時に観察しました。両個体は、1度だけ一方が威嚇？し、他方は逃げるという接触があった以外は、9時30分から11時30分までの観察のあいだ別個に採餌活動をしていました。餌は、地面に落ちている木の実を石の隙間から探しだし、両手で持って食べていました（写真1）。食べていた木の実はすべて液果のように見えたが、その場で種子の採集はしませんでしたので、残念ながら種類は特定できませんでした。



写真1 木の実を食べるシマリス

観察のあいだ岩に腰を下ろしていましたが、カメラを向けても警戒することはなく、というか人に気づかないらしく足下近くまで近寄ってきて、逆にこちらが緊張しました。昨今は評判のよろしくない外来種にもかかわらず、これはなかなかいいんじゃないの！というのが正直な感想ですが、それでも生態系に及ぼす影響は気になります。交雑や競合するような種は見あたりませんが、地域の植生や昆虫相への影響は一度調べてみる必要はありそうです。

当地のシマリスの起源については定かではありませんが、地元自治体等が放獣した事実はありませんので、遺棄されたペットに由来するものと思われます。1997年10月19日に真の谷でいなべ市の清水実氏により1個体が目撃・撮影されたのが最初の記録で、その後2007年6月28日と2008年5月5日にコグルミ谷で撮影された写真資料が藤原岳自然科学館にあります。また、同館がコグルミ谷で実施している初夏の自然観察会においても、ここ10年間ほどは毎回シマリスが目撃されているそうです。本種の寿命は5～6年とされていますので（石井2005；日本の哺乳類改訂版，東海大学出版会），すでに繁殖し、当地に定着しているとみて間違いのないでしょう。

本種の日撃情報は、コグルミ谷と真の谷一帯に集中していますが、同館の清水義孝氏と鈴木淳次氏がやや離れた木和田尾の標高500m付近（いなべ市藤原町山口）で2012年10月15日正午頃に1個体を目撃しており、分布拡大の可能性がります。見誤る可能性の低い動物ですので、登山者等から目撃情報の収集をすれば良いのではないのでしょうか。

文中にお名前を掲載した情報提供者の方々に感謝いたします。

（しみず ぜんきち：松阪市日丘町1386-17）

オオサンショウウオ，アオサギに捕食される

清水 善吉

2015年3月28日13時13分，伊賀市川上地内の前深瀬川で猛禽類調査中の調査員が，アオサギがオオサンショウウオを捕食している場面に偶然遭遇し，写真に撮ることができました（写真1）．撮影者によると，どのぐらいの時間探していたか，どういった環境（たとえば水中にいたか）で捕獲したかなどは不明で，河畔でオオサンショウウオをくわえている場面を目撃し，すぐに写真撮影（ピントを合わせる余裕なし）をしたとのこと．その後すぐにトビが集まり，アオサギはオオサンショウウオをくわえたまま飛び立ち，地形の陰に飛去してしまったので，飲み込めたかどうかは確認できなかったそうです．



写真1 アオサギに捕食されたオオサンショウウオ（環境設計株式会社・撮影）

アオサギは全長（嘴の先から尾端）と体重はウェブサイトのフリー百科事典「ウィキペディア」によると88～98cm，1.2～1.8kgとされており，日本のサギ類では最大です．20～30年前は比較的珍しい鳥でしたが，最近は井堰付近や溜池などで魚を待ち伏せたり，川岸をゆっくりと歩きながら餌を探している姿を良く見かけるようになりました．

このオオサンショウウオも，岸辺の岩の下に潜んでいるところを体の一部がはみ出ていたために探索中のアオサギに発見され，くわえられたものと思われます．写真をみると，体を振って抵抗していますので，死亡個体ではなさそうです．また，オオサンショウウオの大きさはアオサギの半分ほどにみえますので，50cmほどではないかと思われます．このサイズのオオサンショウウオの体重は1～1.2kgほどであることから，アオサギは自分の体重に匹敵するくらいの獲物を捕獲し，少々暴れてもくわえて飛翔することができるようです．なお，確認はできませんでしたが，オオサンショウウオの形状から判断して，アオサギが飲み込むのはそれほど困難ではなかったと思われます．

オオサンショウウオは，川の王様とも呼ばれ，成体となった後の天敵は人くらいとよく言われますが，自然界はそんなにあまいものではないようです．

最後に，貴重な写真を提供していただいた環境設計株式会社様，また，仲介していただいた独立行政法人水資源機構川上ダム建設所の竹澤秀史氏に感謝します．

（しみず ぜんきち・松阪市日丘町1386-17）

事務局から

○イベント案内を二つ同封しましたのでご参加下さい．

参加申し込み・問い合わせは清水 090-9262-4665/shimizuzenkichi@gf7.so-net.ne.jpまで．

編集後記

8月上旬は猛暑続きでしたが，下旬からは一転雨模様の毎日で涼しく，秋の気配を感じる中で夏号の編集作業でした．次号は12月上旬発行予定ですので，秋のたよりをお待ちしています（善）．

自然誌だより105号

発行日 2015年9月16日

事務局 〒515-0835 松阪市日丘町1386-17

清水善吉方 三重自然誌の会

<http://www.zb.ztv.ne.jp/mie-shizenshi>

発行者 三重自然誌の会

郵便振替口座 00800-5-17842 三重自然誌の会

年会費 1,500円（個人）/2,000円（家族）

e-mail:mie-shizenshi@zb.ztv.ne.jp